

令和 7年 1月 30日

福岡県教育委員会教育長 殿

所属校名 宗像市立地島小学校  
職・氏名 教諭 壽 福 翼  
指導者名 教諭 中 垣 里 美

## 研 修 最 終 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

### 記

- 1 研修種別 C 福岡教育大学附属福岡小学校研修員
- 2 研修場所及び所在地 福岡教育大学附属福岡小学校  
〒810-0061 福岡市中央区西公園 12 番 1 号  
TEL (092) 741-4731  
FAX (092) 741-4744

### 3 研究主題及び副題

伝わる文章を書く喜びを味わう特別支援教育国語科学習  
～想起・構成・伝達を繰り返し位置付けた単元構成を通して～

### 4 研究主題及び副題についての説明

#### (1) 主題設定の理由

##### ア 特別支援教育の教育課題から

多様な人々が互いに支え合いながら共に生きる共生社会の中で、知的障害のある子供も、社会の一員として自立し、充実した生活を送ることが望まれている。そのために特別支援教育では、生活スキルの習得、職業教育、社会性の育成など自分の意思を伝えることや身近な日常生活における行動など、日常生活や社会生活を送る上で必要な知識や技能等を身に付けられるように、子供一人一人の特性に応じた個別の支援計画を策定し、適切な支援を行いながら、継続的、段階的な指導を行っている。これらのことから将来、障害のない人と共に暮らしていくためにも、知的障害のある子供も積極的に自分の意思や伝えたいことを、他者に伝える力や行動する力を身に付けていくことは、大切であると考える。

##### イ 特別支援教育国語科の目標から

特別支援学校学習指導要領の国語科の目標として、「言葉で伝え合うよさを感じる」ことが示されている。この「言葉で伝え合うよさ」には、「言葉によって自分の思いや考えをもち、伝え、共感を得ることができること、言葉によって自分の要求を伝え実現することができることなどがある。」と示されている。言葉は、声に出して言ったり、文字に書いて表したりすることで意味のある表現の機能を持ち、その中には「書くこと」も含まれている。現代の情報化社会において、メールや手紙など、日常生活を行っている中でも、さまざまな文字に触れ合うことは多い。話しているときに言えなかった思いや感情を整理して伝えたり、文章として記録に残し何度も読んだりすることができる。「書くこと」のよさである。また、知的障害のある子供も文字にして自分の伝えたいことを書くことができるようになることは、これからの社会を生きる上で大切な力になると考える。このことを踏まえ、伝えたいことを文字で表し、相手に伝わった喜びを味わう本研究は、特別支援学校学習指導要領の国語科の目標である「言葉で伝え合うよさ」を感じることにつながる上で意義深いと考える。

## ウ 子供の実態から

知的障害のある子供の学習上の特性として、成功体験が少ないことにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分でないことが挙げられている。本学級の子供たちも、自分の伝えたいことを話して伝えることができる反面、文章に書いて伝えることが難しい実態がある。また、書く学習になると、主体的に活動に取り組むことが難しい様子が見られる。その背景には、記憶の難しさや認知機能の遅れ、文章構成の難しさがある(図1)。そのために、自分の伝えたいことを文章に書いて相手に伝わる経験が不足していると

記憶力の難しさ	学んだ文字や単語をすぐに忘れてしまう傾向がある。
運動機能の発達遅延	運動機能の発達が遅れているため、鉛筆を握る、文字を書くといった動作が上手くできない。
認知機能の遅れ	文字の形や意味を理解することが難しい。
文章構成の難しさ	文章の構造や文法的なルールを理解することが難しい。
注意力の欠如	注意力が散漫で、1つの作業に集中することが難しい。
成功体験の不足	書くことに対する成功体験が少なく、書くことへの意欲が低い。

図1 知的障害のある子供の書くことへの苦手な要因

考えられる。そこで、書くことに困難が生じる要因へ個別の支援を行うことで、書くことの成功体験を積み重ね、書くことへの自信をもち、伝えたいことが伝わる喜びを味わうことができるようになり、日常生活でも「書いて伝えたい」と自ら書き表そうとする姿につながると考え、本主題を設定した。

### (2) 主題の意味

伝わる文章を書く喜びには、2つの喜びがある。1つは、自分で書けた喜びである。具体的には、伝えたい相手や目的に応じて文章を書けたと感じる喜びのことである。もう1つは、相手に伝わる喜びである。具体的には、返事や反応を受け取り、伝えたいことが相手に伝わったことを実感できたときに感じる喜びのことである(図2)。

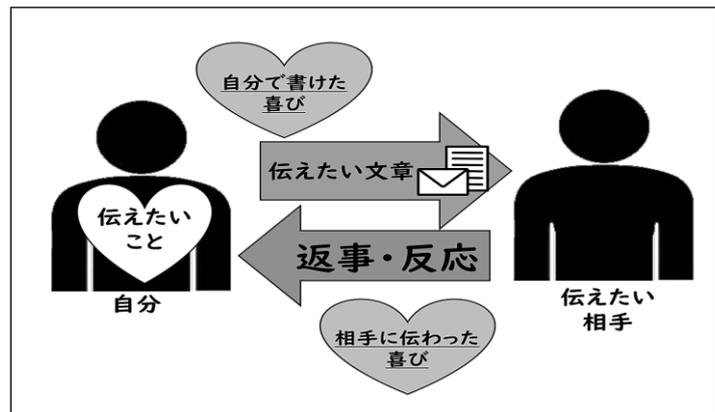


図2 伝わる文章を書く喜びを味わう子供の姿

伝わる文章を書く喜びを味わう特別支援教育国語科学習とは、自分の伝えたいことが相手に伝わるように、分かりやすく順序立てて整理し、文章を通じて相手に伝える学習のことである。この学習を通じて、子供たちは自分で伝えたいことを書けた喜びや相手に読んでもらい返事や反応を受け取ることで、伝わった喜びを味わうことができると考える。またこのような経験を、単元内で繰り返し、さらに年間を通じて繰り返して行うことで、子供たちは書くことの成功体験を積み重ね、書くことへの意欲を高めることにつながると考える。このような学びは、学校生活や家庭生活などの様々な場面で生かされ、学習したことを広げることができると考える。さらに、自分で書けた喜びや、自分の伝えたいことを文章にして相手に伝わった喜びを味わいながら、伝わる文章を書く力は日常生活の中で使える力となり、子供たちはより自信をもって、自己表現ができるようになると思える。このような力は、将来にわたって役に立つ重要なスキルであり、社会生活の中でも活用されると考える。

そこで、本研究では、以下のような子供の姿を目指す。

- 自分の伝えたいことを文章にするために、構成を考え、簡単な語句や短い文で書くことができる子供 (知識及び技能・思考力、判断力、表現力等)
- 自分で伝えたいことを文章にして書けた喜びや伝わる喜びを味わおうとする子供 (学びに向かう力、人間性等)

### (3) 副題の意味

想起とは、自分の経験を思い出し、文章に書きたいことを見付けることである。構成とは、伝えたいことが明確になるように、事柄の順序を考えて、文章を組み立てることである。伝達とは、書いた文章を他者に読んでもらい、伝えることである。これらの3つの活動は、伝わる文章を書くために大切なことである。しかし、知的障害のある子供の学習上の特性として、図1に示すような困難さが、見られる。そこで、想起・構成・伝達に対して個別の支援を行いながら繰り返すことで、子供たちが書くことに対する成功体験を積み重ねることができるようにしていく。

	導入	展開	終末
目的	伝えたいことを決め、文章を書く目的意識をもつこと	自分で書けた喜びや伝わった喜びを味わいながら、文章を書くこと	目的達成を実感し、伝わった喜びを味わうこと
方法	・伝えたい相手からの依頼の文章を読んだり、動画を見たりする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えたいことを思い出す。(想起)</li> <li>・構成を考える。(構成)</li> <li>・文を書く。</li> <li>・お手紙先生からの価値付けをもらう。(伝達)</li> </ul>	・伝えたい相手からの返事の文章を読んだり、反応を見たりする

図3 想起・構成・伝達を繰り返し位置付けた単元構成

#### 想起・構成・伝達を繰り返し位置付けた

単元構成とは、導入段階、展開段階、終末段階の3つの段階のうち、展開段階で上記の3つの活動を繰り返すことである(図3)。導入段階では、子供たちが書く目的を意識できるように、依頼された文章や動画を提示する。例えば、梅組が作った楽器の演奏の様子を他学年が見て、作り方を教えてほしいという依頼の動画や保護者が七夕会の行事はどんなことをするのか教えてほしいという依頼文などを通して、伝えたい相手に向けて説明文や招待状などを書いて伝えたいという意識をもたせる。展開段階では、文章を書いて他者に伝える経験を積み重ねるために、想起・構成・伝達の活動を繰り返し位置付ける。また、書く内容を変化させながら、伝えたいことを文章に書くことを繰り返すことで、子供たちの書くことに対する苦手意識を克服し、書くことへの成功体験を積み重ねることができると考える。終末段階では、自分で書けた喜びや相手に伝わる喜びを味わうことができるよう、伝えたい相手からの返事を受け取る場を設定する。

### (4) 仮説実証のための着眼

#### ア 想起する活動における ICT 機器の活用

自分の経験や体験したことを基に、伝えたいことを思い出すために写真や動画を活用する。伝えたいことを思い出すための写真の活用は、2つある。1つは、順序よく並んでいる写真を見ること、2つは、写真を自分で並べることである。日常の場面を思い出す際には写真が効果的だが、より詳細な記憶を思い出すためには、動画の活用が有効である。動画は、同じ内容の動画を子供の実態に合わせて動画編集の仕方を変えたり、音声・文字表記を追加したりして、伝えたいことを想起できるように支援する。例えば、楽器作りの動画を提示する際に、楽器を作ったことを思い出すことが難しい子供には、楽器の作り方の手順ごとに分かれ、手順の説明の音声や文字がある動画を提示する(図4)。このようにすることで、視覚と聴覚の両方から内容がより効果的に伝わり、文章にして伝えたいことを思い出しやすくなると考える。また、ICT 機器を活用することで、子供たちが自分のペースで内容を繰り返し視聴することができ、自信をもって伝えたいことを想起することができるようになる。そして、想起して伝えたい内容を書くことへの意欲を高めることにつながると思う。

動画編集	順序ごとに区切られた動画	順序が示された動画	編集なし動画
順序について説明の音声	音声解説あり		音声解説なし
順序について説明の文字表記	文字解説あり		文字解説なし

図4 想起する活動における動画の支援の例

## イ 文章構成を考えるための構成メモの活用

自分の伝えたいことを明確にし、事柄の順序に沿った文章構成を考えるために、構成メモを活用する。この構成メモは、子供の実態に応じて教師が提示し、自分で書くことができるように支援する。例えば、楽器作りについて文章で書く場合、文章を組み立てることが難しい子供には、楽器の作り方の順序に沿って並べた写真を提示し、その手順ごとに作成過程が記載された文カードを選べるよう支援する。また、その際、文カードに「はじめに」、「次に」、「最後に」といった順序を表す言葉を記載しておく（図5）。このように、子供の実態に応じた構成メモを活用することで、伝えたいことを順序立てて構成することができるようになり、文章構成をすることへの苦手意識を軽減することができる。と考える。

順序に沿った写真	順序通りに並んでいる写真	順序通りに並び替える写真	写真なし
形式	手順ごとに分かれた文カードの選択	手順ごとに分かれた記述	自由記述
順序を表す言葉	言葉の表記あり		言葉の表記なし

図5 文章構成を考えるための構成メモの支援の例

## ウ 伝達する活動におけるお手紙先生の活用

お手紙先生とは、伝わる文章を書くためのポイントを提示し、書いた文章を読んで、感想を伝える役割である。授業者は、お手紙先生のポイントを基に、子供一人一人にめあてをもたせる。また授業者は、評価の際には、一人一人のめあてに対して、実際の子供の姿や書いた文章を基に評価を行う。このように、授業者とお手紙先生の役割を分担することで、子供たちが第三者にも自分で書いた文章が伝わったと実感をもちながら、学習に取り組めると考える。

表1 お手紙先生を活用する3つの価値

価値	内容
書いて伝わった喜びを味わう経験の積み重ね	最終目標として「伝えたい相手に渡すこと」を重視し、書いた喜びや伝わった喜びを味わう。
課題意識の向上	お手紙先生から順序を捉えるための課題を提示し、伝わる文章を書くための意識をもたせる。
書くことへの自信の向上	書いた文章が相手に伝わり、その文章への返事をもらうことで、書くことへの自信を高める。

お手紙先生を活用する価値は、3つあると考える（表1）。1つは、伝えたい相手に書いて伝わった喜びを味わう経験を積み重ねることである。伝えたい相手に何度も同じような文章を渡してしまうと書いて伝わった喜びが軽減してしまう。そこで、最終目標である伝えたい相手に渡すまでに、お手紙先生を通して、書いて伝わった喜びを味わう経験を積み重ねることができるようにする。2つは、書くことへの課題を意識できるようにすることである。伝わる文章を書くために、子供たちの実態に応じた順序を捉えるためのポイントをお手紙先生から提示し、説明してもらうことで、伝わりやすい文章にするためにどうしたらよいか課題意識をもつことができると考える。3つは、子供たちの自信を高めることである。お手紙先生を活用することで、伝わる文章が書けているか確認することができ、伝わる喜びを味わい、書くことへの自信を高めることができると考える。このようにお手紙先生を活用し、毎時間相手に伝わる文章になっているか確認することで、伝わる文章が書けた喜びを味わいながら、伝えたい相手に文章を渡す際の自信や意欲にもつながると考える。

## (5) 研究のねらい

特別支援教育国語科の「書くこと」において、伝わる文章を書く喜びを味わうことができる子供を育てるために、想起・構成・伝達を繰り返し位置付けた単元構成を通して、その有効性を究明する。

## (6) 研究の仮説

特別支援教育国語科の「書くこと」において、想起のためのICT機器や、構成のための構成メモ、伝達のためのお手紙先生を活用した活動を繰り返し位置付けた単元構成により、子供たちは「書けた喜び」や「伝えたいことが伝わった喜び」を感じることができるであろう。

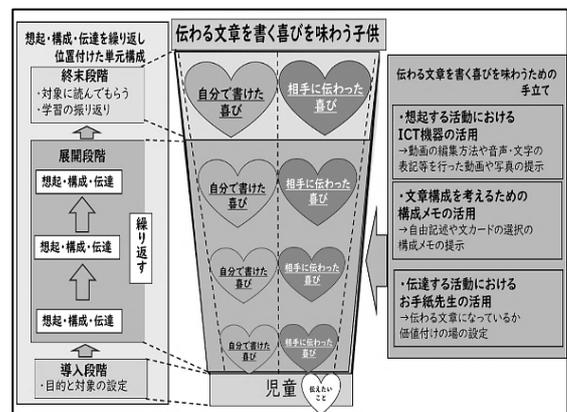


図6 研究構想図

備考 ○ 在籍校と電話番号

宗像市立地島小学校 TEL (0940)62-1171

## 5 指導の実際（10月実証）

### (1) 単元名 第5・6学年梅組「がっきの づくりかたを かこう」

#### (2) 単元の目標

○ 北校舎のみんなに楽器の作り方を伝えるために、伝えたいことを思い出し、事柄の順序に沿って文章の構成を考え、簡単な語句や短い文章で表現することができる。

(知識及び技能・思考力、判断力、表現力等)

○ 北校舎のみんなに分かりやすく楽器の作り方の手順書を書き、書くことができた達成感を実感したり、相手に伝わった喜びを味わったりしようとする。

(学びに向かう力、人間性等)

#### (3) 計画(6時間)

ア 楽器の作り方の手順書に書く内容について話し合う。—————2時間

イ 手作り楽器の作り方を手順書に書く。—————3時間

ウ 楽器の作り方の手順書を書く学習を振り返り、伝えることのよさについて話し合う。—1時間

#### (4) 小単元の仮説

第5・6学年梅組「がっきの作りかたをかこう」の学習において、次の手立てを行えば、伝える文章を書く喜びを味わう子供が育つであろう。

○ 楽器の作り方の手順を、想起するための個の実態に応じた ICT 機器の活用 [着眼ア]

○ 楽器の作り方の文章を構成するための個の実態に応じた構成メモの活用 [着眼イ]

○ 楽器の作り方の順序を捉えながら書いた文章を伝達するためのお手紙先生の活用 [着眼ウ]

#### (5) 指導の実際

##### ア 導入段階（1～2／6時間）

導入段階では、「北校舎の友達や先生に伝える分かりやすい楽器の作り方を書きたい。」という目的意識をもつことをねらいとした。そのために、手作り楽器の作り方を教えてほしいという低学年児童からの依頼動画を提示した(資料1)。また、動画視聴後に、低学年、中学年の友達や教師に、どの楽器の作り方の手順書を書くか、計画を立てる時間を設定した。C児は、資料2のような発言をし、自分で伝えたい相手と伝えたいこと(楽器)の計画を立てる姿が見られた。

##### 考察1

導入段階において、目的意識をもたせるために、低学年(ふじ組)からの依頼動画を提示したことは有効であった。その根拠は、資料2に記された子供の発言にもあるように、学年の実態に応じてどのような楽器であれば作ることができるのかを考えていたからである。これは、相手を意識し分かりやすい文章を書きたいという目的意識をもった姿であると考えられる。

##### イ 展開段階（3～5／6時間）

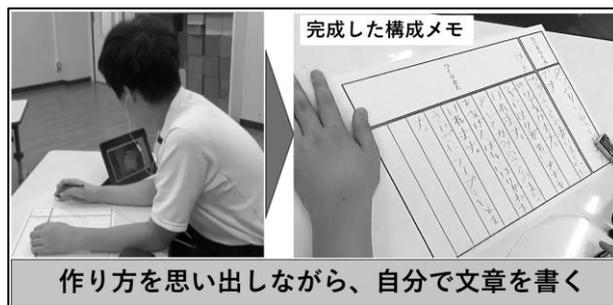
展開段階では、目的意識をもちながら、書く内容や対象を変化しても一人で楽器の作り方の手順書を書くことができることをねらいとした。そのために、「想起・構成・伝達」の活動を繰り返し行った。想起では、楽器の作り方を思い出すために、ICT機器を活用した[着眼ア]。構成では、自分で文章に書くことができるように、写真や順序言葉がなく、自由に記述できる構成メモを活用した[着眼



資料1 低学年(ふじ組)からの依頼動画

T : ふじ組・さくら組・先生たちにどのような楽器なら作ることができますか。  
D児 : 先生たちは、作り方が難しくてもいいと思います。  
C児 : ふじ組さんは、一番簡単なマラカスがよいかもしれません。

資料2 学習計画作成中のC児の発言



資料3 想起しながら構成メモに書いているC児の姿

